

## まず、ユダヤ人に

アミール・ツアルファティ

-ローマからのメッセージ-

<https://youtu.be/1roLXLmUbKc>

ローマの都からシャローム。永遠の都、ローマ人自身の神話によると、この都は紀元前8世紀、狼に育てられた双子の兄弟によって創建されました。彼らは、町を作ろうと決め、そして、あるとき、片方がその兄弟を殺して、自分の名前「ロームルス」をその町に付けました。それが、この町がローマと呼ばれるようになった由来です。ローマの町は、紀元前8世紀から数えると、少なくとも、この場所に2800年間存在し続けている事になります。興味深いことに、今日は使徒パウロとローマ人への手紙について話しますが、パウロは、キリストを信じる群れに宛てて手紙を書きました。私の後ろにあるのは、おそらくイタリア全体で最も象徴的な建築物です。ご覧のように、コロッセオです。円形競技場として知られる建築物で、血なまぐさい戦いを行うために用いられた娯楽施設でした。ここで剣闘士と動物や野生の動物を戦わせていたのです。多くの死刑もまた、まさにこの場所で執行されました。このコロッセオという建築物は、元々は“コロッセオ”と呼ばれておらず、フラウィウス円形闘技場、と呼ばれていました。

フラウィウス円形闘技場。物語は、ウェスパシアヌスが始めたローマ帝国フラウィウス王朝。彼はイスラエルの地に行き、反乱を起こしたユダヤ人グループに対して、ローマ軍の攻撃を始めました。西暦68年のことでした。もちろん、それを終わらせたのは彼の息子ティトゥスで、彼がエルサレムの神殿を倒壊し、そして最終的に全ての戦利品をローマに持ち帰りました。それは、彼自身がそれを、この建物のすぐ後ろにある凱旋門の内側に彫り刻んでいるので、それが分かります。この建築物は西暦72年に開設されました。ティトゥス・ウェスパシアヌスがローマに戻った直後です。とても興味深い事に、奉納された小さな石が発見され、そこには最初にそれを建設した者の名が書かれていました。そして、我々が結論づけたのは、金属の文字を石に留める為に打ち付けてあった釘の跡から…それは、実際にティトゥス・ウェスパシアヌスが書いた碑文で、この建築物は彼が持ち帰った戦利品によって建てられました。もちろん、そこから繋がるのは、ユダヤでの戦争、エルサレムでの戦争における敗北とユダヤの神殿の完全崩壊です。興味深いことに、先ほど述べたように、この建築物はコロッセオとは呼ばれていませんでした。コロッセオという名前の由来は、実際にはフラウィウス朝以前にさかのぼります。ネロが、まだ皇帝だった頃です。ネロは明らかに自己愛が強く、彼は彫像を持っていました。それは自由の女神と同じくらいの大きさで、今日、コロッセオがある場所に立っていました。それは“ネロの巨像（コロッサス）”として知られていました。では、彼はどこからそんなアイデアを得たのでしょうか？ネロの巨像のアイデアは、ロードス島から得たものでした。ロードス島の人々は、ロードスの巨像を建設し、冠をかぶった太陽神のソールが、そこに立っていました。文字どおり、自由の女神の男性版でした。面白いことに、ネロは、彼らが巨像を建てられるなら自分も出来る、と思ったのです。その巨像は30メートル以上もあり、とても大きかったので、巨大なもの（コロッサル）と呼ばれました。それがコロッセオという名前の由来です。コロッセオは、もはやフラウィウス円形演技場とは呼ばれず、今はコロッセオと呼ばれています。

さて、皆さんにご理解いただきたいのは、ローマ自体は、今日、人口200万人の都市で、EUの中で3番目に人が訪れる都市であり、世界中で14番目に旅行者が訪れる都市です。都市の面積は、およそ1,285平方キロメートルと、とても大きく、イタリアのラツィオ州の州都です。ローマはそれ自体が『西欧文明』の発祥の地で、少なくとも2千年前の古代社会では、ローマに行く事が、すべてのローマ市民にとっての夢でした。使徒パウロもそうでした。パウロは一度以上、ローマに行きたいという望みを語っています。それは、彼が評判や名声を求めたためでなく、パウロは、ローマで教える事が非常に大きな価値があると理解していたのです。例えば、私はフィリピンまで行って、そこで教えると、およそ1千万人のフィリピン人が世界中に散らばっていますから、フィリピンで教える事は、私にとって戦略的です。なぜなら、そこから人々が教える

世界中にもたらしてくれると分かるからです。同様の価値がローマにはありました。全ての道はローマに通ずと言われ、あらゆるものがローマから四方に広がっていたのです。それでパウロはローマに行く事を願っていて、パウロが、どこの教会よりも長い書簡、手紙を書いたのは、ローマの教会に向けてでした。それが、とても興味深い方法で、パウロはローマを訪れる前に手紙を書きました。パウロが書簡を書いたとき、彼は一度もローマに行った事はありませんでした。すると皆さんは思うでしょう。「分かった。では誰がローマの教会を設立したんだ？」他の教会はパウロ自身が基礎を敷き、他の人たちが引き継いだ事を私たちも知っていますが、ローマは違います。実はパウロ自身、ローマ人への手紙15章20～22節で述べています。

「このように、ほかの人が据えた土台の上に建てないようにキリストの名がまだ語られていない場所に福音を宣べ伝えることを、私は切に求めているのです。（イザヤ書52:15に）こう書かれているとおりです。

『彼のことを告げられていなかった人々が見るようになり、聞いたことのなかった人々が悟るようになる。』そういうわけで、私は、あなたがたのところに行くのを何度も妨げられてきました。」

(ローマ15:22)

ですから、パウロは言っているのです。「私がこの教会を始めたのではない。だから、私は何となく一歩下がってしよう。それは他の人の働きだから。」さて、皆さんは思うでしょう。「それなら、誰がキリストのメッセージを伝えたのか？十字架での死だけでなく、一番重要な復活のメッセージを？」誰がそれをローマに伝えたか。それは使徒の働き2章にさかのぼります。

「五旬節の日になって、皆が同じ場所に集まっていた。すると天から突然、激しい風が吹いてきたような響きが起こり、」（使徒2:2）そして、使徒の働き2章5節、「さて、エルサレムには、敬虔なユダヤ人たちが、天下のあらゆる国々からきて住んでいたが、この物音がしたため、大勢の人々が集まってきた。彼らは、それぞれ自分の国のことばで弟子たちが話すのを聞いて、呆気にとられてしまった。」（使徒2:5-6）

聖書には、あらゆる国の人々が、どこから来たか書かれています。聖書にはこうあります。

「パルティア人、メディア人、エラム人、またメソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントスとアジア、フリギアとパンフィリア、エジプト、クレネに近いリビア地方などに住む者、また滞在中のローマ人で、ユダヤ人もいれば改宗者もいる。」（使徒2:9-11）

さて、これで分かりますね。五旬節の日エルサレムにいたローマ人がメッセージを聞いて、ローマまで持ち帰ったのです。このように、ローマの教会は始まりました。さて、聖書から、パウロが確かにローマに行った事が分かります。書簡が書かれ、すでに送られた後です。ところで、ローマ人への手紙は、ご存じのようにコリントで書かれました。パウロは基本的にはローマを2度訪れています。そしてその2回とも、パウロは拘束されていました。1回目はエルサレムでの件で、皇帝の前に出るため。AD61年から63年の間、パウロは、あるアパートにいました。そこでパウロは監視のためにつながれていて、彼の拘束が解かれたのはトイレと夜に寝るときだけでした。パウロは、ここに2年間滞在し、彼は何とか福音を宣べ伝えた事が分かっています。この2年間で、パウロは何とか書簡を書く事が出来ました。エペソ人への手紙、コロサイ人への手紙、ピリピ人への手紙、そしてピレモンへの手紙です。そして、ご存じのように、パウロは基本的に、ローマ皇帝から解放されて自由になりました。聖書には、彼はスペインに行く事を願った、とあります。そして、最終的にパウロはローマに戻り、64年から67年の間、彼は再び拘束されます。そして、皇帝ネロがローマに放火し、クリスチャンに責任を負わせて非難した時、クリスチャンに対する大規模な迫害がローマで起こりました。ペテロもパウロも、その年、その頃に死んでいます。2度目に拘束されている間に、パウロは、テモテへの手紙第二を書きました。という事で、このローマ人への手紙、これはパウロがコリントにいる間に、彼が一度も訪れた事のない教会へ宛てて書いたものです。その内容はとても驚くべきものでした。なぜなら、いつもならパウロが手紙を書くときは、例えばコリント人への手紙もそうですが、教会生活の一部である状況的問題について書いています。誰かが間違ったことをした、誰かが間違ったことを言った、「あれをしなさい、これをしなさい、あれは行ってはいけません、これは行ってはいけません。」彼は

状況に関連づけました。ローマ人への手紙では、パウロはそこに行った事がなく、そこの人々をあまり知らなかったのが、パウロが書いたのは、実際、最も純粋な形での福音で、私はそれを「信仰の教義」と呼びます。ですから、ローマ人への手紙は、福音のマグナ・カルタ（大憲章）として知られているのです。そして、信者の生活の、あらゆる重要な問題に関係する書簡として知られています。そしてかなり興味深い事に、その書簡の一番最初の章にパウロは、ローマ人に向けて、こう書いています。

**「私は福音を恥としません。福音は、ユダヤ人をはじめ（“まず”ユダヤ人に）ギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。」（ローマ1:16）**

パウロが信仰の教義を書き始めたその時から、福音の核心を伝道し始めたその瞬間から、パウロは、次の点を実に明確にしました。たとえイエスへの信仰が全てであっても、そしてそれが信じるすべての人にとって救いを得させる神の力であっても、神が、この世で物事を進められる順序があり、それは、“まずユダヤ人が最初”である。

さて、とても興味深いのは…、考えてみてください。なぜパウロはローマ人に向けて、他でもなくこのような事を書いたのか？「まず、ユダヤ人に」まず第一に、この書簡を読むと、このローマの集会には相当数のユダヤ人がいた事が分かります。私たちは、それを事実として知っています。またパウロには、習慣にしている事がありました。どこに行っても小アジア、イタリア、その他の地域で、パウロはまずシナゴグに行って、彼の同胞であり、同国人であるユダヤ人に伝道しました。実際、アンテオケのユダヤ人に対して、聖書の使徒の働き13章46節にはこうあります。

**「そこで、パウロとバルナバは大胆に語った。『神のことは、まずあなたがたに語られなければなりません。』」（使徒13:46）**

私の言いたい事は分かりますよね。それは基本的には、神は全ての人を愛しています。そして神が物事を進めるやり方は、“まず、ユダヤ人に”でした。興味深いことに、聖書の使徒の働き1章8節にはこうあります。

**「しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受け…わたしの証人となります。」**

**（使徒1:8）**

どこが最初ですか？「…エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで」（使徒1:8）ですから、御言葉が世界に伝えられるのに、神が定められた順序があるのです。聖書では、イエスがサマリアの女に話しかけたときに言われました。「救いはユダヤ人から出る」（ヨハネ4:22）彼女もそれを認識していて、イエスもそれを認識されていました。神の御言葉は、エルサレムから出る事を私たちは理解していません。ローマからではありません。パウロは、ローマ人に“向けて”書きました。“まず、ユダヤ人”だと。これは…私が思うに、パウロにとって、伝えるべき非常に重要な事の一つだったのです。ですから、パウロは待てずに、最初の章でそれを伝えたのです。興味深いのは、恵みと祝福がまずユダヤ人に伝えられるだけではなく、ローマ人への手紙2章では、

**「忍耐をもって善を行い、栄光と誉と、朽ちないものを求める者には、永遠のいのちを与え、利己的な思いから真理に従わず、不義に従う者には、怒りと憤りを下されます。悪を行うすべての者の上には（まず）ユダヤ人をはじめギリシア人にも苦難と苦悩が下り、善を行うすべての者の上には、（まず）ユダヤ人をはじめギリシア人にも栄光と誉と平和が与えられます。」（ローマ2:8-10）**

全ての人、罰されるにしても祝福されるにしても、悪を行うにしろ善を行うにしろ、神には、そのやり方に順序があって、“まず、ユダヤ人に”です。神の御言葉を受け取るのも祝福を受けるのも、そして、罰を受けるのも、です。私はよく人に聞かれます。「選民でいるのはどんな感じですか？」私はこう答えます。「最初に苦しむんですよ（笑）」もちろん、たくさんの祝福があります。でも、一つ、御言葉から分かるのは、

イスラエルは厳しく裁かれ、不信仰のゆえに罰を受けたのです。異邦人は、それを自分で体験しなくても学べるのです。聖書のガラテヤ人への手紙3章27～28節にはこうあります。

**「キリストにつくバプテスマを受けたあなたがたは、みな、キリストを着たのです。ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。」**（ガラテヤ3:27-28）

では、私たちはもう男でも女でもないのでしょうか？違います。神は、男でも女でも同じように愛して下さるのです。奴隷も自由人も、ギリシア人もユダヤ人も同じように愛して下さる。神が、「まずユダヤ人に」と言われた事実は、「ギリシア人はダメ」という事ではありません。ギリシア人を少ししか愛していない、という事でもありません。事実、私はいつも言いますが、キリストから離れればユダヤ人とギリシア人には大きな違いがあります。でも、一度信じたならば…聖書は言います。その二つの間に、もはや壁はなくなり、隔てる壁はなくなります。では、なぜパウロはユダヤ人に与えていたのでしょうか？興味深くないですか？私は、このメッセージをエルサレムで伝える事も出来ました。それが、私はここローマでコロッセオを前にしています。それは、パウロがローマ人に純粋な真理を伝えているからです。今後は絶対にユダヤ人を退けてはいけません。なぜなら、彼らは明らかに拒絶していましたから。聖書によれば、ローマ人への手紙の中で、パウロがユダヤ人に、そんな重要な役割を与えた理由は、それが教義の一部だからです。そして、この書簡はとても重要です。なぜなら、これは純粋な教義ですから。誰もが理解しなければなりません。イスラエルを支援し、ユダヤ人に福音を伝道して、神の民を愛し、決して傷つけたり、害したりしない事は、他のあらゆる土台や他の全ての信仰の原則と同じくらい重要です。

ところで、ユダヤ人に福音を伝道することは、信者としてなすべき、他のあらゆる事と同じくらい重要です。“まず、ユダヤ人に”とても興味深いです。パウロは最初に言いました。救いを得させる神の力、福音は、“まず、ユダヤ人に”。それから、呪いであれ祝福であれ、“まず、ユダヤ人に”、と言いました。そして、3章で彼は言います。「律法はユダヤ人を救えるのか？」それから、彼は続けました。ユダヤ人には利点がある、なぜなら**「まず第一に、彼らは神のことは委ねられました。」**（ローマ3:2）そしてパウロは9章で伝えています。イスラエル、彼の同胞たちに対して大きな悲しみ、心に絶えざる痛みがある。彼らが、自分で義を立てようとしている為に。そして、パウロはユダヤ人に対する彼の思いを明らかにしています。彼らが救われるように。そして、彼はパウロの心を明らかにしています。ユダヤ人は救われるだろう。思い出してください。パウロは正真正銘のユダヤ人でした。彼は見て、理解していました。大事なものは宗教でなく、神との関係だと。パウロは、目から鱗うろこのような物が落ちたのです。パウロは目が開かれたのです。パウロは決して言いませんでした。「私は一線を越えた。私はもはやユダヤ人ではない。」パウロはいつも言っていました。自分はイスラエル人で、ベニヤミン部族の出身で、イスラエルの子孫で、私はユダヤ人である、と。そして彼は出来る限り強調しました。私たちは、ユダヤ人への福音伝道を諦めてはならない、なぜなら、神が彼らの救われることを望んでおられるのだから。事実、ローマ人への手紙11章で、聖書は述べています。

**「神は、前から知っていたご自分の民を退けられたのではありません。」**（ローマ11:2）それどころか、パウロは続けて言います。「**彼らの失敗が異邦人の富となるのなら**」（ローマ11:12）**「彼らの受け入れられることは死者の中から生き返ることではなくて何でしょう。」**（ローマ11:15）彼は「それまでだ。彼らは終わった。」とは言いません。彼は言います。「皆さん、これは一時的な盲目だ。イスラエル人の一部がかたくなになった」そして彼は言います。最終的に…**「イスラエルはみな救われるのです。」**（ローマ11:26）

ところで、多くの人が忘れがちな細かい点があります。パウロが、ローマ人への手紙の中で、異邦人に向けて書いた事、彼は実際に15章25節で書きました。「しかし今は、聖徒たちに奉仕するために、私はエルサレムに行きます。それは、マケドニアとアカイアの人々が、エルサレムの聖徒たちの中の貧しい人たちのために、喜んで援助をすることにしたからです。」（ローマ15:25-26）それから彼は言います。「**彼らは喜んでそうすることにしたのですが、聖徒たちに対してそうする義務もあります。異邦人は（ユダヤ人の）霊**

的なものにあずかったのですから、物質的なもので彼らに奉仕すべきです。」（ローマ15:27）

このように、それは霊的なものを超えて、物質的なものにも及びました。パウロは人々に言いました。「あなたがたは、福音を分かち合ってくれたユダヤ人に、霊的なものだけでなく物質的にも借りがある」と。皆さん、パウロは非常に明確にしています。ユダヤ人は神の民であり、神は決して彼らをあきらめないと。キリスト教がイスラエルに取って代わったのではなく、キリスト教は、実際、良い知らせをイスラエルと分かち合わなければならない。私たちは、これら全てを見ました。悪魔の、教会の教義への浸透を。考えてください。“まず、ユダヤ人に”とされています。そして、2つの主要な欺き<sup>あざむ</sup>が起きています。最初に、多くの異邦人が、「異邦人であるだけでは足りない」と言っています。つまり、「私は哀れな異邦人だから、ユダヤ人になる必要があるのでしょうか？」と。これは欺きです。異邦人はユダヤ人になる必要はありません。私たちユダヤ人には、異邦人にユダヤ人になってもらう必要はありません。はっきりさせましょう。エペソ人への手紙2章19節では、

「こういうわけで、あなたがた（異邦人）は、もはや外国人でも寄留者でもなく、聖徒たちと同じ国の民であり、神の家族なのです。」（エペソ2:19）

美しいです。希望のなかったあなたがたが、今は希望があるのです。かつて寄留者だったあなたが、今や家族の一員なのです。

「野生種のオリーブであるあなたが、今や、その枝に混じってつがれ…」（ローマ11:17）

だから彼が、そう言っているのです。それから、エペソ人への手紙2章11～13節で彼は言いました。

「ですから、思い出してください。あなたがたはかつて、肉においては異邦人でした。人の手で肉に施された、いわゆる『割礼』を持つ人々からは、無割礼の者と呼ばれ、そのころは、キリストから遠く離れ、イスラエルの民から除外され、約束の契約については外国人で、この世にあっては望みもなく、神もない者たちでした。しかし、かつては遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスにあって、キリストの血によって近いものとなりました。」（エペソ2:12-13）

ですから、異邦人は不安を感じるべきではありません。または、神の御前での立場が、より低いという事もあります。しかし、2つ目の欺きは正反対のものです。「神はユダヤ人を見捨てられ、教会が新しいイスラエルになった。教会がイスラエルに置き換わった。」ローマ人への手紙11章にはこうあります。

「枝の中のいくつかは折られ、野生のオリーブであるあなたがその枝の間に接ぎ木され、そのオリーブの根から、豊かな養分をともに受けているのなら、あなたはその枝に対して誇ってはいけません。たとえ誇るとしても、あなたが根を支えているのではなく、根があなたを支えているのです。」（ローマ11:17-18）

言い換えると、神は、基本的にこう言っておられるのです。「わたしは、あなたを喜んで受け入れる。でも、あなたは、わたしが前から知っているイスラエル人と置き換わったのではない。彼らが先にそこにいた事を忘れるな。」そして、ローマ人への手紙11章25～26節にはこうあります。

「兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思うことがないようにするためです。」（ローマ11:25）

自分たちがイスラエルと置き換わったと考える人たちは、自分を知恵あるものと考えています。彼らは無知です。パウロはこう言います。

「イスラエル人の一部が頑なになったのは、異邦人の満ちる時が来るまでであり、こうして、イスラエルはみな救われるのです。」（ローマ11:25-26）

ですから、これが神の御心です。神の御心は、イスラエルの民を退けることではなく、神の御心は、最終的に、ユダヤ人が御許（みもと）に戻ることで。ホセア書5章15節にこうあります。

「わたしは自分のところに戻っていよう。」（ホセア5:15）言い換えると、神はご自分の住まわれる場所を離れて、この世に来たのです。「彼らが自分の罪を認め、わたしの顔を慕い求めるまで、わたしは自分のところに戻っていよう。彼らは苦しみながら、わたしを捜し求める。」（ホセア5:15）言い換えると、残念ながら、キリストの拒絶は、非常に大きな苦しみをもたらしました。そして、彼らは熱心に捜し求めます。誰かが熱心に主を捜し求めるとき、聖書は何と言っていますか？

「…神を見いだすこともあるのです。確かに、神は、私たちひとりひとりから遠く離れてはおられません。」（使徒の働き17:27）

聖書のローマ人への手紙11章にはこうあります。「彼らは、福音によれば、あなたがたのゆえに、神に敵対している者ですが、選びによれば、父祖たちのゆえに、神に愛されている者です。」（ローマ11:28）パウロは続けます。「神の賜物と召命は、取り消されることがないからです。」（ローマ11:29）

私はこれを、ヴァチカンのあるローマの町に向かって言います。世界中の13億人以上の人々の母教会。その大部分が置換神学を信じているのです。私は、彼ら全員に言います。神の御言葉が告げています。神は、イスラエルをあきらめていない。事実、「神の賜物と召命は、取り消されることがない」のです。神は、決してイスラエルへの御心を変えません。神は、決してイスラエルに背を向けません。神は、教会が新しいイスラエルだとは一度も言っていません。これは、地獄の穴からの欺きです。なぜか？なぜなら、これは、神の御言葉の教義の中で、非常に重要な柱だからです。それゆえに、敵は、これらのことを広めているのです。さて、多くの人に聞かれます。「アミール、なぜ、そもそも神はイスラエルを選んだのか？」私は、神は旗艦となる国が欲しかったのだ、と答えます。世界への手本とする為に。彼らの振る舞いではなく、神が、どう振舞われるかの見本です。イスラエルを通して、良いこと、祝福であれ、悪いこと、呪いであれ、神は、御自身を、そのご性質を、人間に対して明らかにされたのです。私たちは、基本的に、この山あり谷ありの、神とイスラエルのラブストーリーを見て、学ぶ事が出来るのです。私たちが付き従っている方のご性質、つまり私たちは、神の誠実さを、神の基準を、あわれみ深い愛を、慈悲を見る事ができ、そして同じように、神が拒絶され、他に取って代えられた時のその妬み<sup>ねた</sup>を、怒りを見る事が出来るのです。今日、皆さんすべてへの私からの提言は、私たちが、このメッセージを終えるにあたって、この西ヨーロッパの中心から、…ところで、反キリストはここから現れると私は信じています。イスラエルへの最大の迫害者が起こる場所から、皆さんにお伝えします。教義、神の御言葉が言っています。“まず、ユダヤ人から”ところで、あなたは受け入れる事だけではなく、楽しむ事も学ばなければなりません。覚えているでしょうか。ペテロは、イエスがヨハネに言ったことを聞いて、あまりいい気がしませんでした。そして、イエスはペテロに言いました。「あなたに何の関りがありますか。」（ヨハネ21:22）もしわたしが彼に何か言ったり約束したとして、それは何の関りもない。神のイスラエルへの約束のために、神の異邦人への愛が減る事は決してありません。しかし、神が彼らに持っておられるものを一度あなたが受け入れたなら、あなたは、神のご性質を理解する事を学ぶのです。ところで、これで終わりたいと思いますが、もし、神がイスラエルに対して心変わりをされるのなら、神が、あなたに対して心変わりをしない、という保証はあるでしょうか。事実、神のイスラエルへの選び、誠実さは、全世界への保険証書です。神は契約を守られる神であり、神は、ご自分の言葉と約束とに、誠実な神です。アーメン。



メッセージ by Amir Tsarfati / Behold Israel :<http://beholdisrael.org/>  
 ビホールドイスラエル 日本語 YouTube チャンネル  
<https://www.youtube.com/channel/UCLcuvC6Mr63AqwiiXDkwRVQ>

2020.06.07 (Sun)